Tsukuba Psychological Research
2005, **30**, 73-80

中学生用友人に対する相談行動尺度の作成

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　永井　　智
筑波大学心理学系　新井邦二郎

Developing a scale of friend-consulting for junior high-school students

Satoru Nagai and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is (a) to develop a scale of friend-consulting for junior high school students and to examine its reliability and validity, and (b) to compare scores on the scale in terms of gender, grade, and severity of concerns. Two hundred and forty-eight junior high-school students (122 male and 126 female) completed a questionnaire. The friend-consulting scale was constructed with two factors of "consulting about social-psychological concerns" (7 items) and "consulting about academic-career concerns" (4 items), and found to have sufficient reliability and validity. Analysis of scores indicated that (a) the females had higher scores for "consulting about social-psychological concerns" than the male students, although there was no gender difference in terms of "consulting about academic-career concerns", and that (b) students with more concerns had higher scores on both factors. These findings are quite consistent with previous studies. The utility and the limitations of the scale are discussed.

Key words: consulting behavior, help-seeking behavior

問題と目的

本研究の目的は，(a) 中学生の友人に対する相談行動を測定する質問紙式の尺度を作成し，妥当性・信頼性の検討を行い，それに加えて (b) 尺度得点の群間比較を行い，性差や学年差，悩みの経験による差の検討を行うことである．

石隈・小野瀬（1997）は，中学・高校生が様々な悩みを抱えているにもかかわらず，悩みを抱えた者の内，38%がそれを誰にも相談しないことを報告している．このような，悩みの相談という行動は，社会心理学における援助要請行動（help-seeking behavior）として捉えることができ，海外ではこれまで，援助要請行動に関する研究や，援助要請行動促進のための検討が多く行われてきた．

これまでの援助要請研究においては，思春期が対象となることは少なかったことが指摘されているが（Wintre & Crowley, 1993; Boldero & Fallon, 1995），思春期の段階で様々な危機が訪れることを考慮すると，中学生の段階から，子どもたちの相談行動を研究することは，意義があると考えられる．また，この時期の教育目標として，仲間同士の人間関係形成などがしばしば強調されるように（文部省，1998；東京都教育委員会，2004），中学生の相談相手としては，友人が大きな意味を持つといえる．そこで本研究では，中学生の友人に対する相談行動に注目し，中学生の相談行動を客観的に捉える尺度を作成する．

従来の研究において援助要請行動は，行動観察，実際の悩みと相談経験を自由記述で尋ねる方法，架空の悩みを提示し，質問紙によって相談すると思うかどうかを尋ねる方法など，様々な方法で扱われてきた．しかしながら，悩みの相談行動の場合，自然場面で頻繁に生起するわけではなく，実験状況で生起させることも難しいため，行動観察による測定は適していない．自由記述による方法は，実際の経験

をより反映しやすいが，記述された問題の分類や，記述する問題はどのようにして選択されたかの基準が不明確（Fallon & Bowles, 1999），回答者同士の比較も難しいといった問題があり，統計的分析に適さない面が多い．

一方，架空の悩みを提示した上で質問紙によって相談すると思うかどうかを尋ねる方法は，統計的比較を行いやすいという利点を持つが，あくまでも架空の悩みについての相談意図を尋ねるに過ぎず，実際の相談行動を反映するかどうかが不明瞭である可能性がある．しかしながら，これまでの研究において，誰かしらに対して援助を求める者は，その他のリソースに対しても援助を求めやすいことや（Schonert-Reich & Muller, 1996），ある問題で援助を求める者は，その他の問題でも援助を求めやすいことなど（Fallon & Bowles, 1999），援助要請行動にはその個人において一貫した傾向が少なからずあることが示されている．そのため，このような形式で相談行動を測定することは不適切ではないと考えられる．

そこで本研究では，中学生の友人に対する相談行動を測定するための，質問紙形式の尺度を作成する．また，回答する中学生の負担や実用的な面を考慮し，なるべく簡便なものを作成する．項目については，中学生の実際の悩みに対応させるため，石隈・小野瀬（1997）の中学生の抱やすい援助ニーズを項目として採用する．調査の中で石隈・小野瀬（1997）は，援助ニーズの種類として「心理・社会的問題」「学業的問題」「進路的問題」の三種類を挙げているが，この内「学業的問題」「進路的問題」は因子分析の結果一つの因子にまとまっていることから，本研究で作成する尺度も，「心理・社会的問題」と「学業・進路的問題」の二つを想定する．

また教示では，悩みを自分で解決なかった場合に相談するかどうかを尋ねる．この理由は，第一には想定してもらう主観的な悩みの程度を揃えるためであり，第二には，独力での解決努力を経ないような安易な相談行動を除外するためである．また，Gross & McMullen（1982），相川（1989），高木（1991）らが，援助要請の生起モデルの中で，援助要請実行の前に「自分で解決可能かの査定」という段階を与えているように，一般に援助要請行動は，自分自身での解決が検討されたその後の方略として選択されることが多いとされている．以上のような理由から，質問紙の教示には「悩みを自分ひとりでは解決できなかったとしたら」という記述を加える．

尺度の信頼性には，α係数による内的整合性および，再検査信頼性を検討する．また尺度の妥当性には，基準関連妥当性を検討する．まず，尺度が基準関連妥当性をもつものであるためには，相談行動尺度の得点が，実際の相談頻度を反映している必要がある．つまり，過去に実際の相談経験を持つ者の方が，そうでない者よりも尺度の得点が高くなければならない．従ってまず，尺度の得点と過去の相談経験との関連を検討する．また，併存的妥当性を検討するため，三浦・坂野（1996）の中学生用コーピング尺度から，サポート希求との関連を検討する．サポート希求は，人にサポートを求める程度を測定する尺度であるとされていることから，相談行動尺度の得点とはある程度の正の相関を持つことが予測される．このサポート希求は，妥当性が十分に検証された尺度ではなく，本来ならそのような尺度を，妥当性の基準として用いることは必ずしも適切ではないが，既にこの尺度は幾つかの研究で使用されていることから，利用可能であると判断し，妥当性検討の材料として採用する．

また，実践にあたっての中学生の相談傾向の把握や，今後の研究への示唆を得るために，作成された尺度の得点を用いて性差や学年差，悩みの経験による差の検討を同時に行う．特に心理的問題の援助要請傾向は，通常，男性よりも女性の方が高いとされている．調査対象や，援助要請の対象，問題などによっては，性差が見られないことがあるものの（e.g. Deane & Todd,1996; Deane, Wilson & Ciarrochi, 2001），様々な集団を対象とした研究において，女性の方が男性よりも援助要請傾向が高いことが報告されており（e.g. Gim, Atkinson & Whiteley, 1990; Garland & Zigler, 1994; Raviv, Sills, Raviv & Wilansky, 2000），この傾向は様々な文化に共通して見ることができる．

国内では，課題場面での大学生の援助要請行動には同様の性差が確認されているが（山口・西川，1991），心理的問題における援助要請行動の性差は余り検討されてこなかった．但し，友人関係の研究などにとおいて，「互いに不満に思っていることを言いあう」と言った相互理解活動は，中学生から大学生まで一貫して男子よりも女子の方が多いことなどから（榎本，1999），わが国でも中学生の援助ニーズに関する相談行動には性差がみられる可能性は十分に推察される．

また，援助要請傾向は，その人の抱える問題の程度とも関連することが明らかにされている．例えば，高い抑うつ傾向や（Garland & Zigler, 1994），自殺企図（Sauders, Resnick, Hoberman & Blum, 1994; Deane et al., 2001）の場合，援助要請傾向は

低くなることが明らかになっており，抑うつやそれに伴う自殺企図が，無力感や絶望感などと関係し，問題対処の意思を低下させてしまう可能性が指摘されている．しかしながら，そこまで極端なケースでなければ，通常は抱える問題の程度が高いほど，援助要請意図が高いと言われており，心的苦痛の高さ（Kushner & Sher, 1989; Deane & Chamberlain, 1994; Cepeda-Benito & Short, 1998; Komiya, Good & Sherrod, 2000; Good & Sherrod, 2000）や，ストレスイベントの経験の多さ（Goodman, Sewell & Jampol, 1984）が援助要請行動に関係していることが報告されている．一般にこれは，ニーズが高い程，援助の必要も高まることから，援助要請意図も高まるのだと考えられている．わが国の被援助志向性研究でも，大学生（木村・水野，2004）や，中学生（山口・水野・石隈，2004）において，その人の抱えている悩みが深刻な方が，被援助志向性が高まることを報告しており，中学生でも同様の傾向を持つことが考えられる．

方　法

対象　関東圏内の中学校３校の中学生１～３年生，８クラス，248名（男子122名，女子126名）．

調査時期　2004年６～７月

質問紙の構成

①過去の悩みの相談経験：石隈・小野瀬（1997）による「心理教育的援助に対する中学生の抱えるニーズ」の中から，心理社会的問題から10項目，進路的問題と学業的問題からそれぞれ５項目を中学生の悩んだ経験の高い順に選択し，それぞれについて，「過去一年で，以下のようなことで悩み，友達に相談したことはありますか？」と尋ね，それぞれについて，「相談したことがある」「相談したいと思ったが，しなかった」「相談したことがない」「このことで悩んだことがない」の４つの選択肢の中から当てはまるものを選択させた．

②サポート希求：三浦・坂野（1996）の中学生用コーピング尺度の因子の内，人にサポートを求める程度である「サポート希求」因子を用いた．中学生用コーピング尺度は，ストレッサーが「学業」である場合と「友人との関係」である場合のそれぞれで，因子構造が多少異なっている．本研究では，ストレッサーが「学業」である場合と「友人との関係」である場合の両方で「サポート希求」に分類された項目６項目のみを用い，「１：よくする」～「４：全くしない」の４件法で尋ねた．

③相談行動尺度：①と同様の項目について，「もし，あなたが以下のことで悩み，その悩みを自分ひとりでは解決できなかったとしたら，その悩みを友達に相談すると思いますか？」と尋ね，「１：相談しないと思う」～「５：相談すると思う」の５件法で尋ねた．

手続き　各クラス単位で，ホームルームの時間に無記名で実施した．

結　果

分析に際しては，欠損値の複数あった２名を除いた計246名を分析の対象とした．

１．尺度項目の選定と妥当性

設定した20項目に対し，主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果，３因子構造が得られた（Table１参照）．この内，第三因子に負荷量が高かった項目は，項目５・14のみであったため，この２項目は削除した．また，どの因子にも負荷量の絶対値が0.4に満たない項目15，複数の因子に負荷量の絶対値が0.4以上である項目16を削除した．第一因子の項目は，全て石隈・小野瀬（1997）の心理・社会的問題に由来することから，第一因子は「心理・社会的問題の相談行動」と名づけられた．第二因子の項目は，学業的問題，進路的問題に由来することから，「学習・進路的問題の相談行動」と名づけられた．

次に，この相談行動尺度が，実際の相談行動を反映しているかどうかを検証するため，一旦，二つの因子それぞれについて合計得点を算出し，「過去の悩みの相談経験」との関連を検討した．そこで各因子の合計得点を従属変数とした上で，「過去の悩みの相談経験」から尺度と対応する項目を選択し，各回答者がその項目で回答した選択肢を独立変数として分散分析を行った．

例えば，「心理・社会的問題の相談行動」得点を従属変数とした場合，その因子の一項目目は「自分の性格や容姿（ようし）で気になることがあるとき」である．そこで，「過去の悩みの相談経験」の，「自分の性格や容姿（ようし）で気になることがあるとき」について「相談したことがある」と回答した群と，「相談したいと思ったが，しなかった」と回答した群，「相談したことがない」と回答した群，「このことで悩んだことがない」と回答した群の，計四群の平均値を比較するのである．そして同様に，「心理・社会的問題の相談行動」因子を構成する残りの６項目もそれぞれ独立変数として分散分析を行う．このようにして，「心理・社会的問題の相

談行動」得点においては計9回，「学習・進路的問題の相談行動」においては計7回の，合計16回の一要因分散分析を行った．その際，項目を選定する基準として，(1)「このことで悩んだことがない」を除く三群において，「相談したことがある」群の平均点が「相談したいと思ったが，しなかった」「相談したことがない」群の平均点よりも高くなること．(2) 少なくとも，「相談したことがある」群の得点が，「相談したことがない」群の得点よりも有意に高いこと，という二つを設定した．その結果(Table 2，3参照)，「心理・社会的問題の相談行動」では，基準1を満たさなかった項目6と，基準

Table 1　相談行動尺度の信頼性と因子分析結果

項目	因子分析一回目			因子分析二回目		採用項目の因子分析と信頼性				
	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性	IT相関	項目削除後のα係数
1．自分の性格や容姿（ようし）で気になることがあるとき	.70	.01	−.05	.66	.02	.66	.03	.45	.64	.88
2．なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれたとき	.79	−.10	.04	.75	−.03	.74	−.02	.54	.70	.87
3．友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないとき	.75	−.05	.12	.80	.03	.80	.04	.68	.77	.86
4．学校に行くのがつらくなったり，行きたくなくなったりしたとき	.75	−.05	.04	.78	−.06	.78	−.05	.56	.68	.87
6．自分の性格や自分の身体の変化などを知りたいとき	.50	.22			−.05					
7．友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいと思うき	.64	.05	.14	.74	.07	.75	.08	.63	.72	.87
8．自分の性や異性との交際のことで悩みがあるとき	.51	−.03	.21	.56	.01	.57	.01	.34	.54	.89
9．学校あるいは学級になじめないとき	.74	.00	.10	.79	−.01	.78	−.01	.60	.71	.87
10．自分の家庭のことで心配や悩みがあるとき	.67	−.07	−.03							
11．もっと成績を伸ばしたいとき	−.22	.85	.15	−.07	.88	−.03	.85	.69	.71	.81
12．自分にあった勉強方法が知りたいとき	−.27	.96	.09	−.14	1.00	−.12	1.02	.91	.79	.77
13．意欲がわかず、勉強する気になれないとき	−.02	.71	.06	.14	.61	.17	.57	.45	.67	.83
15．授業の内容がわからなくてついていけないとき	.15	.34	.23							
16．自分の能力、長所、適正を知りたいとき	.47	.43	−.18							
17．自分の将来の職業、自分の生き方，進路に助言がほしいとき	.32	.61	−.18	.37	.38					
18．自分の進学や就職先の選択についてもっと情報がほしいとき	.34	.50	−.04							
19．進学や就職のための勉強や準備にやる気が起きないとき	.13	.71	−.06	.25	.50	.26	.48	.42	.62	.85
20．自分の内申書にどんな内容のことが書かれているのか気になるとき	.35	.46	.00							
5．担任や部活動の先生に対して不満があるとき	.12	−.02	.70							
14．教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき	.09	.12	.64							
サポート希求との相関係数						.50	.32			
再検査信頼性						.64	.62	いずれも，1％水準で有意		
α係数						.89	.86			

2を満たさなかった項目10が，「学習・進路的問題の相談行動」では，基準1を満たさなかった項目18・20の合計4項目が，実際の相談行動を明確には反映しない項目と判断され，削除された．また，分散分析の結果，どの項目を独立変数とした場合でも，「このことで悩んだことがない」を選択した群の得点の平均点が最も低かった．

残った12項目に対し，同様の因子分析を行ったところ，項目17のみ，どちらの因子にも負荷量が0.4に満たなかったため項目17を削除し，再度因子分析を行った結果，各項目とも0.4以上の負荷量が得られた．因子の寄与率，α係数ともに第一回目の因子分析とほぼ変化がないことから，最終的に第一因子7項目，第二因子4項目，計11項目を採用した．また，両因子の因子間相関は．53であった．

最後に，尺度の各因子得点とサポート希求得点との間の相関係数を算出した（Table 1参照）．「心理・社会的問題の相談行動」得点，「学習・進路的問題の相談行動」得点それぞれの，サポート希求尺度得点との相関係数は.50，.32であり，いずれも1パーセント水準で有意であった．以上の結果は予測を支持するものであった．

2．尺度の信頼性

両因子の最終的なα係数は，「心理・社会的問題の相談行動」が.89，「学習・進路的問題の相談行動」が.86であり，本尺度は十分な内的整合性をそなえているといえる．また，再検査信頼性を検証するため，別の群73名（一年生：男子11名，女子11名：二年生，男子12名，女子13名，三年生：男子10

Table 2　相談経験別の尺度得点（心理・社会的問題の相談行動）

項目番号	相談したことがある		相談したいと思ったが相談しなかった		相談しなかった		このことで悩んだことがない		平均点の順位	分散分析結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
1．	30.06	(7.89)	27.95	(7.77)	21.96	(7.90)	21.25	(9.98)	○	1,2>3,4**
2．	30.28	(6.74)	26.03	(9.46)	23.15	(8.26)	20.44	(9.09)	○	1>3,4** 2>4*
3．	29.54	(7.29)	24.76	(8.28)	22.08	(8.41)	21.33	(9.22)	○	1>3,4** 1>2†
4．	29.86	(7.94)	28.72	(9.68)	22.29	(7.90)	22.21	(8.98)	○	1,2>3,4**
6．	28.10	(8.69)	29.04	(8.87)	23.00	(7.43)	22.16	(9.48)	2>1>3>4	1>4** 1>3† 2>4** 2>3†
7．	30.26	(8.12)	28.84	(7.68)	21.56	(7.74)	21.21	(8.87)	○	1,2>3,4**
8．	30.58	(7.20)	28.60	(8.45)	23.69	(8.67)	20.72	(8.47)	○	1>3,4** 2>4**
9．	30.26	(8.75)	29.80	(8.19)	22.74	(8.80)	22.31	(8.69)	○	1>3,4** 2>4** 2>3*
10.	28.62	(10.14)	27.19	(8.01)	24.08	(8.20)	22.41	(9.05)	○	1>4**

Nは項目ごとに異なるため省略した
○は平均値の順が1>2>3>4であったことを示す
†：p<.10　*：p<.05　**：p<.01

Table 3　相談経験別の尺度得点（学習・進路的問題の相談行動）

項目番号	相談したことがある		相談したいと思ったが相談しなかった		相談しなかった		このことで悩んだことがない		平均点の順位	分散分析結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
11.	22.03	(7.61)	21.58	(6.20)	17.73	(6.62)	15.15	(6.84)	○	1>3,4** 2>4* 2>3*
12.	22.59	(7.17)	22.00	(5.86)	17.42	(6.56)	15.13	(7.05)	○	1,2>3,4**
13.	25.35	(6.91)	19.79	(6.35)	18.63	(6.48)	15.60	(7.44)	○	1>2,3,4** 2>4* 3>4*
17.	22.67	(6.64)	24.26	(5.78)	16.57	(6.75)	17.20	(7.17)	○	1>3* 1>4** 2>4*
18.	22.67	(6.64)	24.26	(5.78)	16.57	(6.75)	17.20	(7.17)	2>1>4>3	1>3,4** 2>3,4**
19.	26.69	(6.47)	23.93	(5.57)	18.12	(6.39)	17.53	(7.61)	○	1,2>3,4**
20.	22.85	(7.49)	23.79	(5.82)	18.00	(6.95)	17.49	(7.23)	2>1>3>4	1>4** 1>3* 2>3,4**

Nは項目ごとに異なるため省略した
○は平均値の順が1>2>3>4であったことを示す
†：p<.10　*：p<.05　**：p<.01

名，女子16名）を対象に，2週間の間隔をおいてこの尺度を二度実施したところ，再検査信頼性の値は「心理・社会的問題の相談行動」が.64，「学習・進路的問題の相談行動」が.62であり，十分高い訳ではないものの，ある程度の値が示された．

3．相談行動尺度得点の分析

続いて各尺度得点について，悩みの経験による差，性差，学年差を検討した．

まず，各回答者が「過去の悩みの相談経験」における，相談行動尺度と同様の項目において，「相談したことがある」「相談したいと思ったが，しなかった」「相談したことがない」のいずれかを選択した回数，即ち「このことで悩んだことが無い」を選択しなかった項目数を数え，その合計を各回答者の悩みの経験の多さとした．「心理・社会的問題」の悩みの経験の多さの平均は3.81（得点範囲：0～7，SD＝2.47），「学習・進路的問題」の悩みの経験の多さの平均は2.82（得点範囲：0～4，SD＝1.35）であった．

次に，この悩みの経験の多さが平均以上である群を悩み高群，平均より少ない群を悩み低群とする群分けを，「心理・社会的問題」，「学習・進路的問題」それぞれにおいて行った．Table 4に，相談行動尺度得点の記述統計を，学年・男女別，悩みの高群・低群別に示す．そして各尺度得点が学年，性別，悩みの種類の多さの高低によって異なるかどうかを検討した．まず，「心理・社会的問題の相談行動」得点を従属変数とし，学年（3）×性別（2）×心理・社会的問題の悩みの高低（2）の三要因分散分析を行った．その結果，性別と悩みの高低の主効果が有意であり（それぞれ$F(1,237)=14.67$, 12.63 いずれも$p<.01$），男性よりも女性の方が，また経験する悩みの種類が多い方が，得点が高かった．同様に，「学習・進路的問題の相談行動」得点を従属変数とし，学年（3）×性別（2）×学習・進路的問題の悩みの高低（2）の三要因分散分析を行った．その結果，悩みの高低の主効果のみ有意であり（$F(1,237)=13.43$ $p<.01$），経験する悩みの種類が多い方が，得点が高かった．いずれも，学年による有意な得点の差は見られなかった．

考　察

1．相談行動尺度の信頼性・妥当性

本尺度は，「心理・社会的問題」「学習・進路的問題」の2因子から構成されており，石隈・小野瀬（1997）による中学生の援助ニーズと同様の2因子構造を持つものであった．また，項目には過去の相談経験を十分に反映したもののみを採用しており，尺度の各因子得点は，サポート希求得点との間に正の相関見られたことから，この尺度はある程度の妥当性を持つものと考えられる．また，信頼性については，内的整合性と再検査信頼性を検討した結果，ある程度の値が示された．以上のことから，本研究で作成された相談行動尺度は，信頼性・妥当性ともに大きな問題はないと判断された．

本尺度は簡便化を図るため，元々用意した20項目のうち，9項目が削除された．そのため，提示する悩みの種類は，必ずしも中学生の援助ニーズを網羅したものではない．しかし，20項目全てに対する因子分析と，採用した11項目のみに対する因子分析では，ほぼ同様の因子構造が見られたことから，この11項目で，中学生の相談行動を代表させることは不適切ではないと考えられる．

2．各得点の分散分析結果

各得点に対する分散分析の結果，心理・社会的問題における相談行動は，男子より女子の方が，また悩み低群よりも悩み高群の方が得点が高く，これらの結果は先行研究と一致するものであった．一方，「学習・進路的問題の相談行動」得点では，悩み低

Table 4　性別，悩みの種類の多さによる相談行動尺度得点の記述統計

		高群			低群			全体			分散分析結果
		M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	
心理・社会	女子	22.56	(7.26)	88	19.19	(6.90)	37	21.57	(7.29)	125	女＞男　p＜.01 高群＞低群 p＜.01
	男子	19.15	(6.92)	47	15.17	(6.74)	74	16.70	(7.05)	121	
	全体	21.39	(7.30)	135	16.50	(7.02)	111	19.19	(7.56)	246	
学習・進路	女子	11.90	(4.49)	86	9.97	(4.35)	39	11.30	(4.52)	125	高群＞低群 p＜.01
	男子	12.00	(4.30)	77	9.16	(4.44)	44	10.97	(4.54)	121	
	全体	11.94	(4.39)	163	9.54	(4.39)	83	11.13	(4.52)	246	

群よりも悩み高群の差は見られたが，性差は見られなかった．何故学習・進路的問題の悩みに関する相談には性差が見られなかったのであろうか？これには，いくつかの理由が考えられる．

一つ目として，Newman & Goldin (1990) は，女子は男子よりも成功しようという期待が低く，学業的な援助要請を躊躇すると論じており，実際，算数に関する学業的援助要請において，男子よりも女子の方が，援助要請によるネガティブな反応に関心を示していたことを報告している．現在のわが国での学習に対する社会的な要求については検討が必要であるが，このような要因が相談行動の性差に影響している可能性がある．

また，Addis & Mahalik (2003) は，何かに困って援助要請をすることは，決して特別なことでなく，誰もが行っている普通のこと，という認識が，男性の援助要請促進につながる可能性を論じている．学校という教育の場にいれば，お互い，勉強について苦戦していることは大方自明のことである．もし，学習・進路的問題で悩むことは，心理・社会的問題で悩むことよりも一般的なこととして認識されているならば，それによって，男子も女子と同程度に学習・進路的問題の悩みの相談が可能になっている可能性がある．いずれにせよ，現時点でこの原因を特定することはできず，この点について今後更なる検討を行ってゆく必要があろう．

一方，悩みの経験と相談行動の関連は一貫した傾向が見られ，これは従来の研究結果と一致するものであった．これはその人が実際に悩むことで，悩みの困難さや，援助の必要性を実感したり，具体的な解決法略を探索し，「いざという時は友達に相談する」という選択肢が準備されるためだと考えられる．

3．検討課題

本研究で作成された尺度には，一点留意点がある．悩みの経験が多いほど，相談行動尺度の得点が高まることや，尺度の基準関連妥当性の検証のための分散分析段階において，「このことで悩んだことがない」群の得点が最も低かったように，本尺度の得点には悩みの経験が影響している．先にも論じたように，これは実際に悩みを経験することで，「いざという時は友達に相談する」という選択肢が用意されたためである可能性がある．であるならば，逆にほとんど悩みを抱えたことがない者は，そもそも「いざという時は友達に相談する」ということをあまり考えない状態にあると考えられる．そして，そういった者が将来何かしらの悩みを抱えた場合，この得点は変化する可能性があるのである．この点は従来の研究でも，検討されてきておらず，この場で結論を述べることはできない．しかし，悩みを抱える前後で，その人の相談意図が変化する可能性は十分考えられる．そのため，単純に本研究の尺度のみを用いて，その人の将来の行動を予測することは，慎重になるべき場合もあることを留意しておく必要があろう．

引用文献

相川　充　1989　援助行動　大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編）個人から他者へ　社会心理学パースペクティブ1　誠信書房　Pp.291-311.

Addis, M.E. & Mahalik, J.R. 2003 Men, masculinity, and the contexts of help seeking. *American Psychologist*, **58**, 5-14.

Boldero, J. & Fallon, B. 1995 Adolescent help-seeking: what do they get help for and whom? *Journal of Adolescence*, **18**, 193-209.

Cepeda-Benito, A. & Short, P. 1998 Self-concealment, avoidance of psychological services, and perceived likelihood of seeking professional help. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 1-7.

Deane, F.P. & Todd, D.M. 1996 Attitudes and intentions to seek professional psychological help for personal problems or suicidal thinking. *Journal of College Student Psychotherapy*, **10**, 45-59.

Deane, F.P., Wilson, C.J. & Ciarrochi, J. 2001 Suicidal ideation and help-negation: Not just hopelessness or prior help. *Journal of Clinical Psychology*, **57**, 901-914.

Deane, F.P. & Chamberlain, K. 1994 Treatment Fearfulness and distress as predictors of professional psychological help-seeking. *British Journal of Guidance and Counselling*, **22**, 207-217.

榎本淳子　1999　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，**47**，180-190.

Fallon, B.J. & Bowles, T. 1999 Adolescent help-seeking for major and minor problems. *Australian Journal of Psychology*, **51**, 12-18.

Garland, A.F. & Zigler, E.F. 1994 Psychological correlates of help-seeking attitudes among children and adolescents. *American Journal of Orthopsychiatry*, **64**, 586-593.

Gim, R.H. Atkinson D.R., & Whiteley, S. 1990 Asian-American acculturation, severity of concerns, and willingness to see a counselor. *Journal of Counseling Psychology*, **37**, 281-285.

Goodman, S.H., Sewell, D.R. & Jampol, R.C. 1984 On going to the counselor: Contributions of life stress and social supports to the decision to seek psychological counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 306-313.

Gross, A.E. & McMullen, P.A. 1982 Models of the help-seeking process. In B.M. DePaulo, A. Nadler & J.D. Fisher (Eds.), *New directions in helping*. Vol. 2 *Help-seeking*. New York: Academic Press. Pp.45-70.

石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究－子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部省科学研究費補助金（基盤研究＜c＞＜2＞）研究成果報告書（課題番号06610095）.

木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について－学生相談・友達・家族に焦点を当てて カウンセリング研究, **37**, 260-269.

Komiya, N., Good, G.E. & Sherrod, N.B. 2000 Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **47**, 138-143.

Kushner, M.G. & Sher, K.J. 1989 Fear of Psychological Treatment and Its Relation to Mental Health Service Avoidance. *Professional Psychology: Research and Practice*, **20**, 251-257.

三浦正江・坂野雄二 1996 中学生のおける心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, **44**, 368-378.

Newman, R.S. & Goldin, L. 1990 Children's reluctance to seek help with schoolwork. *Journal of Educational Psychology*, **82**, 92-100.

Raviv, A., Sills, R., Raviv, A. & Wilansky, P. 2000 Adolescents' help-seeking behaviour: the difference between self- and other-referral. *Journal of Adolescence*, **23**, 721-740.

Sauders, S.M., Resnick, M.D., Hoberman, H.M. & Blum, R. W. 1994 Formal help-seeking behavior of adolescents identifying themselves as having mental health problems. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **33**, 718-728.

Schonert-Reich, K.A. & Muller, J.R. 1996 Correlates of help-seeking in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **25**, 705-731.

高木 修 1997 援助行動の生気過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.

Wintre, M.G. & Crowley, J.M. 1993 The adolescent self-concept: A functional determinant of consultant preference. *Journal of Youth and Adolescence*, **33**, 369-383.

山口智子・西川正行 1991 援助要請行動に及ぼす援助者の性、要請者の性、対人魅力、及び自尊心の影響について 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, **40**, 21-28.

山口豊一・水野治久・石隈利紀 2004 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連－学校心理学の視点を生かした実践のために カウンセリング研究, **37**, 241-249.

（受稿3月22日：受理5月31日）